

⑬ 日本国特許庁 (JP)

⑭ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報 (A)

昭59—13708

⑮ Int. Cl.³
A 61 K 7/00

識別記号

庁内整理番号
7306—4C

⑯ 公開 昭和59年(1984) 1月24日

発明の数 1
審査請求 未請求

(全 4 頁)

⑮ 化粧品

⑰ 発明者 豊田英一

横浜市西区老松町29番地野毛山
マンション1E

⑱ 特 願 昭57—122729

⑲ 出 願 昭57(1982) 7月14日

⑳ 発 明 者 嶋田忠洋

横須賀市長沢1533番地の35

㉑ 出 願 人 株式会社資生堂

東京都中央区銀座7丁目5番5
号

明 細 書

1. 発明の名称

化粧品

2. 特許請求の範囲

アミノ糖、N-アセチルアミノ糖およびこれらの塩からなる群より選ばれた一種又は二種以上の化合物を配合してなる化粧品

3. 発明の詳細な説明

本発明は天然の多糖、ムコ多糖、糖タンパクを酸、アルカリ、酵素等で分解して得られるアミノ糖類を化粧品成分として配合することの特徴とし、皮膚に対しては滑らかさ、しっとり感を与え、毛髪に対しては艶、髪の上り効果を上げる新規な化粧料を提供するものである。

従来、天然物から抽出した各種原料、例えばタンパク質、多糖、抽出エキス、天然高分子等がその使用効果が特徴的であるため化粧料に多用されている。また、これらを構成している単

体又はオリゴ体、例えばアミノ酸、ペプチド等も同様の目的で使用されている。

本発明者らは上記事情に鑑み、皮膚、毛髪等に有用な天然系原料を得るべく鋭意研究を重ねた結果、昆虫や甲殻類の外骨格に存在する構造多糖の構成単位であるN-アセチル-D-グルコサミン、D-グルコサミンや脊椎動物組織の多糖や糖タンパク、糖脂質の構成単位であるN-アセチル-D-ガラクトサミン、D-ガラクトサミン等に注目し、これを化粧品基剤に配合することにより、皮膚や毛髪に特徴的な有用性を見出し本発明を完成するに至った。

すなわち本発明は、アミノ糖、N-アセチルアミノ糖およびこれらの塩からなる群より選ばれた一種又は二種以上の化合物を配合してなる化粧料である。

本発明に用いられるアミノ糖、N-アセチルアミノ糖およびこれらの塩は、昆虫、カニ等の甲殻類の殻のキチンや、動植物の多糖、とくにムコ多糖、糖タンパク質、糖脂質等の天然高分子を酸、

アルカリ、酵素等で分解することにより得られる分子中にアミノ基を有する単糖又は糖アルコールおよびこれらの誘導体であり、例示すればN-アセチル-D-グルコサミン、N-アセチル-D-ガラクトサミン、D-グルコサミン、D-ガラクトサミンおよびこれらの塩酸塩又は硫酸塩等があげられる。

上記したアミノ糖、N-アセチルアミノ糖およびこれらの塩にはモノアミノ糖の他、ジおよびトリアミノ糖がある。

本発明においてアミノ糖、N-アセチルアミノ糖およびこれらの塩は化粧料中0.001~30重量%程度配合され、本発明の効果を奏し、かつ化粧料としてベタツキ等の弊害を有さない点で0.1~5.0重量%程度が好ましい。

本発明の化粧料には、上記した必須成分の他に化粧料のタイプに応じて油分、水、界面活性剤、保湿剤、アルコール、増粘剤、香料、酸化防止剤、キレート剤、色素、防腐剤等、通常化粧料に用いられる原料が配合できる。

次に実施例および比較例をあげて本発明の効果を詳述する。本発明はこれにより限定されるものではない。例中%は重量%を表わす。

実施例1 化粧水

①	グリセリン	5.0%
②	クエン酸	0.03
③	クエン酸ソーダ	0.05
④	アラントイン	0.1
⑤	エタノール(85%)	10.0
⑥	POE(15%)オレイルアルコールエーテル	1.0
⑦	D-グルコサミン塩酸塩	1.0
⑧	紫外線吸収剤	0.1
⑨	香 料	0.1
⑩	防腐剤	0.1
⑪	色素	適 量
⑫	イオン交換水	82.52

(製法)

⑥⑧⑨⑩を常温にて混合溶解し、同じく常温にて

特開昭59-13708(2)

本発明の化粧料は、皮膚に対しては滑らかな使用感、保湿効果、柔軟効果、皮膚賦活効果を行い、皮膚に、はり、つやを与える。また、毛髪に対しても、保湿効果、柔軟効果を有し、毛髪につやを与え、くし通りを良くするものである。

(以下余白)

混合溶解した①②③④⑦⑧⑨⑩中へ攪拌添加して化粧水を得た。

比較例1

実施例1から⑦のD-グルコサミン塩酸塩を除いた以外は全て実施例1と同一処方で、実施例1と同様の製造法で化粧水を得た。

実施例1および比較例1の蒸発速度を下記の試験法で求めた。試料0.2ccを1×1cmの口紙上にとり25℃、50%相対湿度の条件下で蒸発する水分量を測定し、これを時間で除すことにより蒸発速度を得た。結果を表1に示す。

	実施例1 (mg/分)	比較例1 (mg/分)
蒸発速度	6.5	8.0

表1から明らかなようにアミノ糖1%を配合した実施例1は蒸発速度が遅く、保水性が高いことを

示している。

実施例 2 O/W クリーム

①	グリセリン	5.0%
②	P E G 400	2.0
③	グリチルリチンモノステアレート塩	0.1
④	アラントイン	0.1
⑤	N-アセチル-D-グルコサミン	1.0
⑥	セクノール	4.0
⑦	スクワラン	5.0
⑧	ステアリン酸	1.0
⑨	密ロウ	1.0
⑩	ワセリン	1.0
⑪	POE(25モル)セチルアルコールエーテル	2.0
⑫	グリセリルモノステアレート	1.5
⑬	防腐剤	0.1
⑭	香料	0.15
⑮	イオン交換水	76.55

(製法)

特開昭 59- 13708 (3)

⑤～⑮を70℃にて混合溶解し、同じく混合溶解した①②③④⑥の中へ攪拌溶解して乳化する。ホモジナイザーにより乳化液子を整え、その後熱交換器にて常温まで冷却してクリームを得た。

実施例 3 バック

①	ポリビニルアルコール	10.0%
②	P E G 4000	0.4
③	グリセリン	2.0
④	セクノール (85%)	8.0
⑤	D-アセチルグルコサミン	0.1
⑥	防腐剤	0.1
⑦	香料	0.1
⑧	イオン交換水	78.3

(製法)

常温で④～⑦を混合溶解し、①②③および⑧を80℃で混合溶解した中に攪拌添加した後常温まで放冷してバックを得た。

実施例 4 口紅

①	ヒマシ油	20.0%
②	セチルアルコール	20.0
③	密ロウ	5.0
④	キャンデリラロウ	30.0
⑤	N-アセチル-D-グルコサミン	2.0
⑥	スクワラン	13.0
⑦	カルナバロウ	5.0
⑧	顔料 (色料)	5.0
⑨	香料	適量

(製法)

①～⑧を80℃にて溶解混合し、型に流しこんで常温まで放冷した後、型からとり出して棒状口紅を得た。

実施例 5 ヘアリンス

①	塩化アルキルトリメチルアンモニウム	3.0%
②	セチルアルコール	1.0

③	D-グルコサミン塩酸塩	2.0
④	防腐剤	0.1
⑤	グリセリン	5.0
⑥	香料	0.3
⑦	色素	適量
⑧	イオン交換水	88.0
⑨	POE(8モル)ステアリルアルコールエーテル	0.6

(製法)

①～⑨を70℃にて加熱攪拌溶解した後、熱交換器にて常温まで冷却しヘアリンスを得た。

比較例 2

実施例 5 中④のD-グルコサミン塩酸塩を除いた以外は実施例 5 と同一処方、同様の製造法でヘアリンスを得た。

実施例 5 および比較例 2 について20～30歳の女性パネル20名にて実使用テストを行い、毛髪のつや、くし通り性について評価した。その結果、実

特開昭59-13708(4)

実施例5が良好とした者18名、比較例2が良いとした者1名で本発明にかかるヘアリンスの効果が確認された。

実施例6 ヘアトニック

①	エタノール(95%)	50.0%
②	グリセリン	1.0
③	POE(ROTH)硬化ヒマシ油エーテル	1.0
④	香料	0.5
⑤	N-アミフル-D-グルコサミン	0.005
⑥	ヒノキチオール	0.005
⑦	イオン交換水	47.490

常温にて①および②～⑥を攪拌溶解し、これに⑦を加えて⑦を攪拌しながら添加してヘアトニックを得た。

実施例7 クリーム状洗淨料

①	ラウリン酸	7.0%
---	-------	------

⑧	ミリスチン酸	13.0
⑨	パルミチン酸	5.0
⑩	密ロウ	1.0
⑪	ステアリルアルコール	2.0
⑫	バチルアルコール	2.0
⑬	ジプロピレングリコール	10.0
⑭	P E G 300	10.0
⑮	グリセリン	5.0
⑯	カセイソーダ	2.0
⑰	D-ガラクトサミン	10.0
⑱	D-グルコサミン	10.0
⑲	香料	0.2
⑳	イオン交換水	22.8

(製法)

⑧および⑨～⑲を70℃にて加熱攪拌溶解し、同じく混合溶解した⑦～⑱および⑲の中へ添加し攪拌する。ホモジナイザー処理を行った後、熱交換器にて常温まで冷却し、洗淨用クリームを得た。

比較例3

実施例7中の⑩⑪を除き⑯のカセイソーダを5.0%とする以外は実施例7と同一処方と同様の製法によりクリーム状洗淨料を得た。

実施例7および比較例3について、20～40歳の女性パネル20名にて実使用テストを行い、シャンプー等での頭皮の落ち具合、使用後感について評価した。その結果、20名全員が、実施例7の方が脱脂力がマイルドで、肌のつっぱりがなく、しかも洗淨効果があると評価した。

特許出願人 株式会社 資生堂